



菅沼緑、二年振り三度目のステップス個展である。私はこの展覧会の直前に、他のグループ展で同じ系統にある菅沼の作品を見た。

前回の個展で、菅沼は厚みのある楕円に筆致が残る作品を発表した。初個展の際には、くすんだ多色の小品が多数、展示されていた。

今回の作品の特徴は、ムラのないフラットな色彩に、様々な形の立体が組み合わされている。側面も独立した色彩が施されている。

色と形の組み合わせは、まるで遊具を連想させる。床においてあれば、見る者が自由に組み合わせ、自由に「遊ぶ」ことが可能になるのではないかとさえ思える。

実際、他のグループ展では床に置いてあった。しかしその作品は遊具に成り得ず、権威という誤解が生じないようにしたいが、まるで仏像のように崇高な雰囲気を出した。今回の展示では壁掛けに徹したこともあるのだが、この作品群の「絵画的性」が強調されているように感じる。

絵画が盛り上がっているのではなく、絵画とは盛り上がっているのが前提にすら感じる程に、絵画的なのである。では絵画と立体の違いは何かと考えざるを得ない。

絵画は描かれることを無理強いする必要がなく、平面という定義から解放されていいのではないかというのが、私の提案である。それが今回の菅沼の作品の特徴でもある。

遊具とは子供を楽しませる「サービス」が盛り込まれているのだが、子供の目は厳しく、「サービス」が強ければ強いほど、その罠に嵌る子供の数は減る。

大人は容易に「サービス」に慣れてしまう。「サービス」にモノの本質は存在しない。むしろ遠ざかる。本物の遊具を形成すれば、それこそ芸術の真理に近づく。

しかし菅沼の作品は遊具ではない。しかし「見る」という近代的自我を消滅させ、この場において「楽しい」というよりも、「ここにいていい」ことを意識すると、この作品群の意味は大きな価値転換となるであろう。我々はこの作品群のように、現代美術をもっと楽しむべきではないか。

